

『平家物語』国語教育の一側面(3)

―木曾最期伝説の広がりと魅力―

武田 昌 憲

はじめに

「日頃は聞きけんものを、木曾の冠者。今は見るらん、左馬頭兼伊予守朝日の將軍源義仲ぞや」

という勇ましい木曾義仲の名乗りの場面とともに、やがて、

「日来は何とも覚えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」という本音の吐露によって滅びの終章を迎えた生きざまを描いた『平家物語』の「木曾最期」は諸行無常を味わう上でも白眉の教材である。すでに安藤裕司氏、高木信氏、大津雄一氏^(注1)をはじめとして、多くの教材の取り組み方法が示されている。どれも興味深く、面白い。本稿ではそれに追加・重複しての作品の魅力への取り組みの提案である

木曾義仲の伝承

前号(『尚綱語文』五号)では那須与一の伝説の広がりについて言及したが、今号では、やはり高校等の教科書に載るところが多い「木曾最期」についても、その伝説の広がりを認識していきたい。

木曾(源)の場合は、生まれが武蔵国で、父義賢が当地で殺された関係で、信濃の国木曾へかくまわれたという数奇な運命がある。木曾で成長した義仲は、治承四年(一一八〇)八月に従兄弟の源頼朝が平家打倒の挙兵をしたことに続いて同年九月に木曾で旗揚げをしたことから歴史にその名を刻むことになった。彼は信州を席卷したのち、平家軍を追撃しつつ、北陸経由で上洛、平家の都落ちの美学を演出する。が、その後の平家追討には失敗し、都での不興と兵力の消耗などで疲弊したところを、頼朝配下

の関東精鋭の源氏軍により壊滅してしまう。義仲自身、逃げる機会があったのに、乳母子の今井兼平の約束を果たすため、結局近江の粟津の浜で討死を遂げてしまう。『平家物語』の中でも、興亡（栄光と滅び）の様を見事に描いた、もう一人の主人公ともいえる存在である。義仲没後、彼にまつわる伝説が各地に点在することになる。一番の特徴は、彼自身の伝説よりも彼を取り巻く人々、―巴御前や乳母子の今井四郎兼平、兄仲家を育てた源頼政や以仁王等の関係者の伝承である。伝説地も那須与一の場合は出生地の下野国が圧倒的に多いが、義仲の場合も、出生地の武蔵国・特に育った地の信濃国や進軍地の北陸地方を中心に伝承地が多い。以下に都道府県別の伝承地を一部かかげてみる（注2）。

青森県 唐糸草子の唐糸とは関係ない唐糸伝説がある

岩手県 （なし）

宮城県 本吉町に巴が使った鏡岩など

秋田県 由利町に巴一門の館跡など

山形県 山形市に覚明の史跡など

福島県 下郷町に以仁王を祭る高倉神社など

茨城県 古河市に頼政神社があるなど

栃木県 安蘇郡に木曾義高の墓があったなど

群馬県 草津温泉町に義仲の守り本尊があるなど

埼玉県 武蔵嵐山町に父義賢の墓、義仲産湯井戸があるなど

千葉県 旭市に木曾義昌の史跡、本埜村に巴の塚があるなど

東京都 世田谷区に義賢の墓があるなど

神奈川県 横須賀市に巴の墓があるなど

山梨県 源次郎岳で家臣の岩竹源次郎が自刃したという

長野県 木曾町德音寺に義仲等の墓があるなど義仲の関係史跡が最も多く、四百以上指摘されている

新潟県 上越市に巴の墓がある、糸魚川市に今井兼平の城跡があるなど

静岡県 新居町に巴が住んでいたなど

愛知県 蟹江町に義仲が再建した神社などがある

など

三重県 伊賀市に兼平が駒を繋いだ松があるなど

岐阜県 中津川市に義仲勧請の神社などがあるなど

富山県 富山市に義仲の出陣地があるなど八十余の指摘

石川県 金沢市に義仲の陣屋後があるなど百十余の指摘

福井県 今庄市に義仲軍が立て籠もった 燧ヶ城があるなど六十余の指摘

滋賀県 大津市義仲寺に義仲の墓があるなど

京都府 京都市東山に義仲の首塚があるなど

大阪府 松原市に手塚光盛の墓があるなど

奈良県 奈良市に義仲・兼平の隠棲した堂があるなど

和歌山県 紀勢町に樋口金光を弔た塚があるなど

鳥取県 (なし)

島根県 (なし)

徳島県 (なし)

香川県 多度津町に義重と覚明が建てた地藏院があるなど

愛媛県 中山町に山吹の墓があるなど

高知県 鏡村に今井兼平の弟が戦った城跡があるなど

福岡県 (なし)

佐賀県 (なし)

長崎県 (なし)

大分県 日田市に以仁王遺児と長谷部信連が居住した寺があるなど

熊本県 (なし)

宮崎県 (なし)

鹿児島県 (なし)

沖縄県 (なし)

西日本では義仲の関係伝承が少ないが、平家物語関係の伝承は数多くあることは前稿でも指摘した通

りである。テキストに載っている文章で終わりにしてはならない。現代との時間的・空間的な持続性に気づいてもらわないと、すなわち日本の伝統文化としての古典文学作品の魅力が理解されないのではなかろうか。古典と現代は違うと切り捨てられる（興味を削がれる）ことがないようにしたいものである。

ところで義仲の後裔について一言。義仲の末裔を称する戦国時代の本曾郡の豪族、本曾氏は義仲との縁を巧みに利用して、武田信玄ともご親類衆として重用されるが、本曾義昌の時に織田信長方に付き、武田勝頼滅亡のきっかけとなる。その後、義昌は紆余曲折を経て徳川家康に従い、やがて下総の海沿いの地（下総国海上郡阿知戸）、一万石を与えられて本曾から出て移封。善政を行ったがその地で崩じ、其子（義利）の時代に家康によって領地を取り上げられ、本曾家は没落・分散することとなる。その地（現、千葉県旭市・地名は旭将軍義仲から取られている）ではその義昌の功績を記念して、行事や碑、像が建てられている（注3）。

又、御伽草紙の一つ、『唐糸草子』（注4）からの影響

もあるかもしれない伝承も考えられる。義仲の関連作品は時間的余裕があれば、この『唐糸草子』の伝承は紹介してもよいと思う。

他の作品との関連でいうならば、教科書では必ず近世で載る『奥のほそ道』の作者松尾芭蕉は、自分の墓を本曾義仲の墓所にと指定したことで知られる、滋賀県大津市の義仲寺に芭蕉は眠っている。言うまでもなく周知のことであるが、是非、文学史でも関連して説明してほしい。

教材のより良い理解のために

乳母制度と乳母子・乳兄弟の理解―は、「本曾最期」の「一所の死」の理解でも重要であるが、武士の世界のみにある制度ではないことに注意を注がせたい。『源氏物語』ほかの古典文学作品の登場人物の関係を探る上でも重要である。

これに軍記物語では、武士間における主従関係が深く絡まってくる。大津雄一氏の指摘する「融合的愛」の究極の形態（注5）である。一方、巴は義仲とは「美女（びんじょ）」として特別な関係であったが、今井兼平

程の乳兄弟の契りほど深くはない。否、深かったとしても、土壇場で巴を女だからと言って落とすのは、義仲の彼女に対する救済的な目的も含めてまたいろいろな解釈が必要ともなるかもしれない。古典の（または『平家物語』の）読みの深さ・幅広さというものであり、古典の魅力ともなる。

滅びの美学、亡びの時間―は

「頃は正月二十一日、入相ばかりの事なるに、薄氷は張りたりけり。深田ありとも知らずして、馬をさっとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもく、打てどもく動かず」

義仲の討死の時刻は一月二十一日の薄氷の張った夕刻である。那須与一の扇の的も、壇ノ浦の平家の亡びも、春の夕方である。また義仲、与一、壇ノ浦も水に関わった表現を取っている。秋の夕暮や、秋の「名月」が中世の無常観を表すものではあるかもしれないが、『平家物語』では、春の夕暮の夕日とそれを映す水面（薄氷も含む）が亡びを象徴するものである。前途に薄氷が張った深田の中に迂闊にも馬の足を進ませたのは正に義仲の前途の絶望感を暗示

するものである。那須与一が弓を射る時に北風が吹いて心理の厳しさを象徴していたのと同じように（射て見事に命中させた後は春風が吹く）、気候と心理は連動・一致している。さりげない季節感の描写が読む者に皮膚感覚を呼び起こし、作品を引き締めている。

馬との連携―『平家物語』は馬の文学と言ってもいいくらい、馬（特に馬の名）が多く登場する。那須与一の馬も主人とともに運命を共有している存在である。義仲の馬も同じである。「聞ゆる木曾の鬼蘆毛と云ふ馬」に乗って散々戦った義仲であったが、「日来は何とも覚えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」という義仲の本音の時点で、実は馬も義仲とともに体力の限界が迫っていることも推測される。最後には深田にはまり、馬の機動的な生命が断たれた瞬間、主人も命を終えるのである。この点壇ノ浦合戦では、馬の代わりに船が役目を果たす。平家の船が義経の戦略で、舵取や漕ぎ手が集中的に狙われて射倒され船の機能を喪失した時、平家は亡びを迎えるのである。授業で馬（船）自体を取り上げることとはほとん

どないと思われるが、ほんの少し前までは身近な存在であった。

以上、『平家物語』には伝承地が多く、歴史文学の一面も持つ軍記物語の広大さを実感する。又諸本のこと（『源平盛衰記』等）、平家琵琶（平曲）のこと、装束描写（鎧や刀剣類）のこと、等々、説明したいことは日本文化の果てまで限りなく続く。『平家物語』は教材として取り上げたらきりがなくらい中身が詰まっている。それだけに教える側の知識・力量が必要なることを考えると教える側も大変である。

教材だけで終わらない、身近な所に関連事項が居座っている点が、古典作品、―特に軍記物語の空間的・時間的に連動している面白さを読み取れる点の魅力の一つである。人間の戦いは過去のものにしなければならぬが、『平家物語』は過去の教材ではない、今も生きている教材なのである。那須与一伝承等も含めて、『平家物語』という教材のつかかりは、意外にも地元の伝承という形で、現代でも身近な所に転がっているものである。

注

- 1、安藤裕司「高校古典教材「木曾最期」考―今井四郎・巴の取り上げについて―」『愛知教育大学大学院国語研究』23、平成27年、高木信「戦場を踊りぬける―〈鎮魂〉する巴―」『日本文学』43―8 平成6年、大津雄一「軍記と王権のイデオロギー」第六章「平家物語 義仲の愛そして義仲への愛」翰林書房 平成17年など。
- 2、「木曾義仲史跡・伝説一覧」ホームページ。『南木曾の歴史』南木曾町博物館 平成8年。笹本正治『戦国大名武田氏の研究』思文閣出版 平成5年など
- 3、注2、参照。木曾義仲没落後、木曾の地は別系統の氏族が入ってきて、やがて木曾を名乗るようになるということだが、近年まで（血筋は別として）義仲の子孫とされてきた。
- 4、『唐糸草子』は義仲の家臣、手塚光盛の娘、唐糸が、頼朝の暗殺を狙って失敗し、岩牢に入れられていた。これを知った、唐糸の娘万寿

が鶴岡で舞を頼朝に披露する機会があり、其れを賞した頼朝の褒美として万寿は母の助命嘆願をし、見事許されて母娘ともども故郷に帰るという話。

5、注1、大津氏論文。なお、大津氏の論文は、義仲最期を王権への反逆者の物語として刺激的な指摘をされ、教材研究をする上でも、また軍記文学作品の読みとして魅力的な示唆に富む。